

読み屋原子朗

出版花ざかりで、まだ新人かと思つてい
るような若い作家の全集まで相次いで出る
始末で、それは日本だけのおかしな現象だ
などといわれたりしている。しかし私は、
まだ生きている作家の全集が出るぶんには
活字にすると読みぬきなどあつても、
その作家に聞けばすむことだから面倒がな
くて、さぞかし安穩あんゑんだろうな、とふと思つ
ことがある。というのも、これが物故作家
や詩人の全集となると、未発表の草稿や、
ことに日記や書簡など、書きなぐり式のも
の多くて、読めない字が沢山あつて、編
纂者泣かせの場合も少なくないわけで、杉
田玄白たちが阿蘭陀語をやつたように頭を
よせ集めて解説に疲れはてるけしきを、私
もさんざん味わつたばかりだからである。
それは大手拓次という風変わりな、実は大

変な詩人の全集だったが、雑纂類の早書き
の文字がどうしても読みぬけて夢の中まで
その文字がちらちらして、ずいぶんくやし
い思いをして二、三年もそんなことがつづ
いた。全五巻だが、なにしろ各巻八百ペー
ジから千三百ページといった分量の八十五
パーセントが全集初出の未発表生原稿から
なので無理もなかった。その労苦はどこに
もあらわれないのだから、やつたことのあ
るひとにしかわかつてもらえないだろう。
自慢するつもりはないが、私はかなりう
まく読めるほうらしい。墨がきのちゃん、
くずした早がきのものなら、かなりすらす
ら読めるので、重宝がられるときもある。
古文書の類、すすけた尺牘せきごくや短冊の類、寺
社奉納の昔の連俳の類まで読まされたりす
る。これはわが幼少のみぎり、まだ小学校

に上る前から筆をもたされたり、戦争中な
にもすることがなくて本を読んだり、やけ
くそになつて朝から晩まで古法帖や古筆を
なぞつて真つ黒になつていた余徳かとも思
い、また勉強にもなるので、そう自信があ
るわけでもないのに、人のよさも手伝つて
おだてられるとついで熱中するということ
なる。

ことし「岡本かの子全集」が全十五巻で
冬樹社から出るので、物すごく資料を集め
て専門家なみにかの子にくわしくなつた編
集者のTさんの持込むかの子の未発表書簡
類を、こないだから日本女子大の熊坂敦子
さんと一緒に読まされて、これはなにがし
のくせ。(丸っこい、かの子一流の)はあつ
ても、ちゃん、とくずした字だから、かなり
楽に、おもしろく読めた。ちなみに今度の
かの子全集は私などほんのお手伝いにすぎ
ないが、厳密な本文校訂にもとづく決定版
全集となるようだ。各巻別冊つき、その上
別巻もつくという研究者にも有難いぜいた
くな企画で、かの子のすべてを網羅すべく
岡本太郎さんみずから張切つておられるよ

うだ。

ところで、こないだは北海道で苦労して出世した役人だった故人の手記をどきりと持込まれて、ある婦人から読んでくれとたのまれたが、これはことわった。一見達筆そうに見えるペン書きだが、忙しい間をぬすんで書きためたのだろう、おそろしく我流の、無茶な早がきの筆蹟、たとえ一人の人間の切ない苦闘の記録でも、これを読みこなす時間の持合わせがないので、ていねいにことわった。

ある日、なにかの冗談のついでに、「読み屋でも開業して……」と私は友人たちを笑わせたのだが、「読み料は時代の古いものほど高くする、というのはどうだろう、一字百円とか……」私はそういつた。一字読めばすし、のつは食える。うまくゆけばこれで余生が送れるかもしれない——。

ところがその晩、家にかえて夕刊を見ていると、サトウサンペイの漫画にこんなのがあった。——わがフジ三太郎君夫妻のところに、郷里の老人から毛筆がきの手紙がくる。読めない。手紙をどこかへ持って

ゆく。そこには「読み屋」という看板がかかっていて、鼻メガネの老人が手紙を読んでいる。

私は笑った。私はしかしこの漫画より一足先に思いついたのだから、あの冗談は明日でなくてよかった。そう思って、も一度ちょっと笑った。

ところで、その読み料だが、どうも考えてみると、時代の古いものほど高いというのはおかしい。逆に古いものほど安いというのが適正料金ではないか、と私は反省した。なぜなら古いものほどくずし、かたは折目正しいのが普通だろう。毛筆をうまくあやつったもので、そんなに我流のものはない。それなら読み易いわけだから、これは安くてもよい。新しいものほどペン書きになり、それだけくずしも怪しくなる。これは当然高くしなければならぬ。刀剣屋の値段とは反対に、昭和のなまくら新刀は、なまくらほど高くすべきだ。

いつごろから、このなまくらが多くなってきたかと考えると、これも一概にはいえないけれども、ざっと早い話が、大正期の教

育から、字は急速におかしくなる。学校で教えることが多くなって、字の筆順やくずしかたなどちやんと教えなくなってくるのか、すると大正期に教育を受けた昭和のおとなたちから、一般に字が下手になり、読みづらくなる。それはペン書きの流行と歩調をそろえているようだ。学者や文士たちにしても例外ではない。どうもこれは学問や教育が、いかなれば、 Δ 和漢・洋 ∇ から Δ 和洋・漢 ∇ になり、はては Δ 漢 ∇ は蒸発して Δ 洋・（和） ∇ になってくる傾向と切り離せない事情で、私のいう昭和は Δ 洋・（和） ∇ といつてよく、あるいは今はもつとカッコつきの Δ （洋）・（和） ∇ の時代かもしれない。すると筆蹟は、筆順もくずしもあつたものでなく、早書きはもう大変りべらるな我流で、針金の林のミミズの迷路。読み屋もお手上げになるだろう。

読み屋を開業するなら今のうちかもしれない。そして全集を出すなら、やっぱり作者が生きているうちに出しておかねば、死後だとひどい全集になってしまうのかもしれない。